

第34号 華山会報

平成27年4月11日

公益財団法人華山会

「蛮社の獄」第二の男、小関三英

明海大学ホスピタリティ・ツーリズム学部教授 岩下 哲典



いわゆる「鎖国」のもとにあった江戸時代、西洋の学問をして、日本があまりにも残念な状態にあるから、せめて異国船打ち払いはやめましようよという提言をひそかに小説化して仲間内で回して読んでいたら、隠密に目をつけられて、別件で逮捕され、尋問されて終には切腹や獄に繋がれたのが「蛮社の獄」だと思います。渡辺華山は在所田原で塾居のあと切腹、高野長英は一端逃亡、自首、入牢、脱獄、全国逃亡、江戸に戻り潜伏、ひそかに開業するも町奉行所の手の者に踏み込まれ、闘争中落命しました。二人とも悲劇的な最後を遂げています。

「蛮社の獄」といえば華山と長英ですが、第三の男、小関三英もなかなか悲劇的な最後を遂げています。華山が捕縛された直後、自分にも幕吏の手がおよぶことが予測できた三英は、自ら頸動脈を切って絶命します。場所が赤坂溜池の岸和田藩邸内の自宅二階だったらしく、その血が階段を伝って階下に及んだとも言われています。

なぜ、三英はそんなに早く自ら命を絶ってしまったのでしょうか。三英は、出羽鶴岡の農民出身です。江戸に出て医学を吉田長淑に学びます。一度は故郷で開業しますが、ほどなく仙台藩医学学校の教師になります。しかし、再び江戸に出て、幕府医官桂川家に入ります。蘭書翻訳に目覚め、医学書のみならず、西洋史やキリスト教関係の書籍の翻訳もするようになりました。そんな時、華山や長英に出会います。この三人は一見まったく性格が違うように思いますが、華山は、先に見える人で、かつ内に秘めてはいるが、かなりの負けず嫌い。長英は三英と同じ東北人でもよくしゃべる才人タイプで、ハングリー精神が旺盛。三英は無口で一つのことに集中するタイプでしょう。でもそれだけに馬が合って三人で西洋の学術研究にどんだんのめりこんでいったのでしょう。西洋社会の成り立ちや宗教、最近の西洋事情など、それぞれが見た文献の翻訳などを持ち寄ってああでもない、こうでもない議論しあう様子が想像されます。彼らにとって、それはいきがいであり何物にも代えがたい楽しい時間だったと思います。

一方、幕府の目付鳥居耀蔵は、伊豆葎山代官江川太郎左衛門とともに江戸湾警備の見分を命じられましたが、その復讐書で江川に水をあけられたことを恨み、その背景に蘭学・洋学があることを知って、それらの学問を危険視しました。そこで配下の小笠原貢蔵を使って華山や長英、三英を調べさせていたのです。小役人ほど陰険ですね。三英は、華山の紹介で岸和田藩主岡部氏の藩医になれたようですが、さらに幕府の蛮書和解御用でもあったので、幕府内部の情報網から自分もマークされていることを知っていたようです。また三英は足も悪く、体力的にも牢獄生活は無理だと思ったために、自ら命を絶ったのだらうと言われています。どんなに悔しかったことでしょう。三英も華山も長英も、もう少し生きて、ペリー来航を迎えることができたならば、どんなに良かったらうと思えますが、人生はまったくままならないものです。

最後に、三英には、内科学の業績である『西医原病略』『泰西内科集成』と江戸時代のナポレオン情報としては最も詳しい『那波列翁伝初編』があります。特に『那波列翁伝初編』は、佐久間象山や吉田松陰、西郷隆盛の愛読書でした。蛮社の獄は確かに悲劇でしたが、華山・長英・三英の蒔いた種はペリー来航後着実に幕末の志士たちに受け継がれ、来るべき時代の扉を開けたといえましよう。今の時代になすことが出来なくても次の世代のために今何を為すべきか、蛮社の獄は教えてくれています。

つながりのある学び

田原市教育委員

横田 威

平成二十六年三月に「緊急課題対応プラン【田原市教育振興基本計画】改革のスイッチをオンに」が作成され、田原市の教育に関するアクションプランが発表されました。平成二十二年三月に策定した田原市教育振興基本計画の中間年が近づき、田原の教育が直面する緊急課題を八つに絞り、実践的な対応を提示したものです。

田原市教育振興基本計画の基本理念には、「ふるさとに学び 人がつなぐ 田原の人づくり」と記されています。学校でのふるさと学習への取り組みの中で、田原市博物館の分館である民俗資料館や渥美郷土資料館、シエルマ吉胡、皿焼古窯館など

美の施設を見学すると、より広い視野が持てるのではないかと感じています。特に平成十九年にオープンしたシエルマ吉胡では、体験学習もできますので、家族で出かけてみるのもお勧めです。小学生においては、一度に多くのことを体験、記憶することには無理もありますので、低学年なら三つくらいまでの少ない方が良いでしょう。繰り返し訪ねてみることも大事で、行くとたびに新しい発見もあります。中学生は、ふるさと学習（キャリア教育）を重視して

ます。社会の中で自らの役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現するための力が求められています。この視点に立って日々の教育活動を展開することこそが、キャリア教育の実践の姿です。体を動かし、体験することやボランティアなどは最も取り組みやすいと言えるでしょう。その上に立って、高校生の一例として渥美農業高校では第六次産業にもチャレンジしています。第一次産業としての農業が生産だけにとどまらず、それを原材料とした加工食品の製造・販売や観光農園のような地域資源を生かしたサービスなど、第二

次産業や第三次産業にまで踏み込むこと。食品加工・流通販売にも業務を展開している経営形態がこれからは求められています。こうしたふるさとを想う中で、市としては、田原市博物館の企画展として「東三河のジオサイト」「渥美線展」を開催しました。これらの展覧会は、新たな客層を取り込み、気軽に立ち寄ることができる企画展となりました。また、ふるさとの帰郷展としても心なごむ企画展だったと思います。ただ、こういうものがあるんだ、という気付きも重要で、展覧会情報としてのチラシなどを市の多くの行事や生涯学習イベントの際に広報し、PRしてもらえると良いと思います。

今年四月から教育委員会制度の法改正により教育委員長と教育長が一本化され、新教育長制度が始まりました。教育委員会は、地域とともに活動するものでなくてはなりません。各種行事への参加や教育委員の研修を多くして、各課の情報を収集し、共有して対応していきたいと考えています。

今年四月から教育委員会制度の法改正により教育委員長と教育長が一本化され、新教育長制度が始まりました。教育委員会は、地域とともに活動するものでなくてはなりません。各種行事への参加や教育委員の研修を多くして、各課の情報を収集し、共有して対応していききたいと考えています。

今年四月から教育委員会制度の法改正により教育委員長と教育長が一本化され、新教育長制度が始まりました。教育委員会は、地域とともに活動するものでなくてはなりません。各種行事への参加や教育委員の研修を多くして、各課の情報を収集し、共有して対応していききたいと考えています。

目次

題字「華山会報」元華山会理事

故小澤耕一氏

P ① 「蚕社の獄」第三の男、小

関三英 岩下哲典

P ② つながりのある学び

横田 威

P ② 目次

P ③ 画家渡辺華山の心象

P ④ 渡辺華山『毛武游記』⑪

P ⑧ 博物館所蔵品から

渡辺華山筆

『客坐掌記（天保九年）』⑪

P ⑪ 研修視察

P ⑬ 華山の田原行（十八）

P ⑮ 企画展のご案内

P ⑯ 公益財団法人華山会
田原市博物館 からご案内

画家渡辺華山の心象

雪山高隠図

奈良岩雄氏寄贈田原市博物館蔵

天保八年（一八三七）

絹本着色

縦九七・〇cm×横三七・〇cm

遠景に急峻な切り立った山と垂直に流れ落ちる瀑布を描き、中景左に林越しの家屋と中央やや手前に、ゆるやかな坂道をその家を訪ねて行く馬上の人物と従者が描かれる。近景にはやはり手前に大きく樹木を描き、室内の景も描写される。また、庭先の門をその主人が開き、後ろに童子が続く。人物の描写の差がより遠近感を強調している。また、近景と中景の間には川の流れがあり、手前の川辺には葦が描



かれており、水面が墨で表現されているが、水はゆつたりと流れている。雪山の上の暗い空も同色で表現されている。山間木々の常緑の葉上には胡粉を使用して雪が残っていることを表現している。

款記に「丁酉嘉平月寫（写）晚翠樓（楼）登」とある。瓢箪形朱文の「登」白文長方印の「華山」を捺している。「晚翠樓」は場所を指していると考えられるが、特定できない。文政五年（一八二二）の『壬午図稿』の中に扇面の縮図があり、その落款に「晚翠窓登」

とあるが、年代も異なり、同じ意味かは不明である。嘉平月は十二月である。天保八年は飢饉と大風害により、田原藩では、藩主康直が五月と十月の二回にわたり、参勤交代の延期を幕府に願い出て、許可されている。

なお、この作品には、附がある。土佐藩士で、高島秋帆に兵学・砲術を学んだ法制学者細川潤次郎（一八三四～一九二三）の題字「雪氣崢嶸」の次に、愛知県豊橋出身で、漢学者の石川鴻斎（一八三三～一九一八）

が大正三年（一九一四）四月に記した由来書があり、伝来として伊勢神宮の神官であった久志本家に伝わったことが書かれている。さらに、華山の二男、小華に画を学んだ渡辺華石（一八五二～一九三〇）もその由来を記している。

この作品は四月十一日から田原市博物館春の企画展「帰ってきた国指定重要文化財千山万水図」初公開奈良岩雄氏寄贈」で公開される。

田原市博物館副館長学芸員

鈴木利昌

渡辺華山『毛武遊記』

11

研究会員 加藤 克己

此はらからの母親なりけるはいとすこやかなる媪にて、今年八十余、此七十八歳のとしでものかく事も得ならざりけるが、さてこゝろにおもふ様、われ眼ありて字をしらず、口ありて此情言事あたはず、今より字をまなびたらむにハ此世はいかにせん、せめて後の世の便にもなりなんやと、おのが子なるお梶に問ひしかバ、

天保二年（一八三二）十月十七日続き

この兄妹（田村金兵衛・梶）の母親という人は、たいへん元氣な老女であつて、今年八十歳余りになる。この人が七十八歳の年に、字を書くこともできなかつたが、ひそかに心に思うに、自分は目があるのに字を知らず、口があるのに心に思うことをことばに表現することができない。今から文字を学んでも、この世ではどうにもならないだろうが、せめてあの世の便りにはなるだろうか、自分の子であるお梶に聞いてみると、

わらハしらぬ事ながら後の世はさて置、此世の用にも立ぬらんとて、やがていろは句ふといふ歌をかきてあたえしかバ、昼ハ苧をつミ衣ぬひ、夜ハ燈をか、げ、手習ひし、ことし六七年ばかりもかくありしかバ、今物読事も字をかく事も

心のまゝにぞありける。されど今に夜習ふ事ハ廃らず、丑三つ頃までもいねすとぞ。

（お梶は）あの世のことは私の知らないことだからさておき、（文字を学べは）この世の用には立つてしようと言つて、やがて、「いろは歌」を書いて与えた。すると、（母親は）昼は苧を摘み衣を縫い、夜は灯火をかかけて手習ひをし、今年で六、七年ほどにもなるが、このように続けていたところ、今では書物を読むことも字を書くことも心のままにできるようになつたという。それでも、今なお、夜習うことは怠らず、真夜中までも寝ないという。

※ いろは句ふ 「いろは歌」のこと。

※ 苧 からむし。麻の一種。茎の皮を縮みなどの織維に用いる。

※ 丑三つ 丑の刻を四つに分けた第三にあたる時。今の午前二時から二時半ごろ。一説に、午前三時から三時半ごろ。また転じて真夜中、深夜。

又うばに一怪事あり。今年春の事なりけん、前歯二本萌していと大きやかなるをしらざりけるが、物喰ふとて見いだし胆をけし、いとほづかしてぬかんとするをおしとめて、今壺分ばかりにハなりし。

また、この老女にひとつ奇妙なことが起こつた。今年春のことであるが、前歯が二本生えてきて、たいへん大きくなるまで知らずにいたが、ものを

食べる時に見つけて、びつくり仰天し、たいへん恥ずかしいといつて抜こうとするのを、皆で押し止めて、今では一分（約3mm）ほどになつた。

※ 胆をけし 「胆をつぶす」と同じ。たいへんびつくりする。非常に驚く。

※ 壺分 長さの単位。約3mm。

老婆の肖像



色あかくつやよし、目明らかにて眼鏡を不_レ用、髪黒くこしまがらず、神氣甚しまりよし。

顔色は赤く、つやがよい。目は（よく見えるので）メガネを使わない。髪の色は黒く、腰は曲がつていない。気力はたいへん引き締まつている。

※ 神氣 精神力。気力。

天王宿定右衛門方より鮎来たる。予のためにかこひて今日に及、藍よりいだし見るに其大壹尺四五寸、重百四五十目、驚きたり。写真す。此昼飯に塩焼として食ふ。味美一尾をつくす。真に可_レ記也。

天王宿の定右衛門の所から鮎が届いた。私のだ

めに貯えて今日に至った。駕籠から出してよく見ると、その大きさは一尺四五寸（四十二〜四十五cm）、重さは百四五十匁（四百三十一g）もあり、その大きいことに驚いた。写生する。早速、昼飯に塩焼きにして食べる。おいしくて一尾食べてしまった。まことに記すべきである。

※ **天王宿定右衛門** 前号参照。

※ **かこひて** 貯えて。

※ **籃** らん。大きいかご。

※ **写真** ありのままを写し取ること。写実。写生。華山が描いた「香魚図」が残されている。鮎の大きさとしては特大級である。

茂兵衛絹を持し、其母の真を写さん事を乞ふ。応ず。

茂兵衛が生絹（すずし）を持ってきて、その母の姿を書き写してほしいと頼む。応じる。

※ **絹** 生絹（すずし）。

岩本幸像 この年七十五歳。



天王宿付近の渡良瀬川

この川で巨大な鮎が育ったと考えられる。



奥山名横伯言、号昌庵、又号寄亭、医を業とす。凡桐生医、幾数十人、昌庵独功を奏。よりて一郷ハさらなり。遠近名ヲ聞て来もの数をしらず。

得る所の黄白も又おびた、しといふ。性侠を好、人をあはれむ。其家流寓の客男女をかぎらずあつまりて寄食す。これがために家甚貧、前酒かひ後衣を典すといふなるべし。

奥山（名は慎）伯言は、昌庵と号し、また寄亭と号し、医療を仕事としている。およそ桐生の医者は幾数十人もいるが、昌庵ひとり成功を成し遂げた。それで、桐生一郷はもちろんのこと、遠近各地からその名を聞いて来る者の数知れない。得るところの金銭もまたたいへん多いという。性格は任侠を好み、人に情けをかける。その家には他郷から放浪してきた客が男女を限らず集まって身を寄せている。そのために家はたいへん貧しく、先に酒を買って（その支払いのために）後で着物を質に入れるというような状況である。

※ **奥山伯言** 二代奥山昌庵。伯言は字。桐生新町の医者。余暇に文墨をたしなみ、桐生詩社の同人。天保六年（一八三五）没。

※ **黄白** 黄色と白色。金と銀。転じて、金銭をさす。

※ **前** 先。

※ **典** 質に入れる。

※ **前酒かひ後衣を典す** 先に酒を買うのだが、現金を持って買いに行くのではなく、帳面につけておいて後で支払うのだから、買った後に衣を質に入れて酒代を払うことができる。

此夜余をまねき小酌す。目撃するところ左のごとし。女稽者壺人江戸の人、おとしばなしを業

とせるもの一人、角力壱人、舌講者壱人、此他憐て外へ出し業をなさしむるもの、料理茶屋よりしてくさぐさの業せるもの数をしらす。

この夜、私を招いて少し酒をついだ。目撃したところは左のようである。女芸者一人(江戸の人)、洒落で落とす小話を仕事とする者一人、相撲取り一人、講談などで生計を立てる者一人、このほか世話しながら外へ出して仕事をさせる者、料理茶屋をはじめとしてさまざまな仕事の者が数知らずいる。

※ **稽者** 芸者。「芸者」とは、もとは芸に秀でた者。舞踊、音曲などで、酒席に興を添えるのを業とする女性をそう呼ぶようになった。江戸中期ごろから江戸で用いられた言葉で、上方の芸子にあたる。後、上方でも用いられるようになった。本文にわざわざ「女稽者」とあるのは、「男芸者」もあつたから。

※ **おとしばなし** 洒落や語呂合わせを使って、最後をおもしろく結ぶ話。落ちのある話。落語。

※ **舌** ことば。また、話すこと。弁舌。

※ **舌講者** 講談などで生計を立てる者。

※ **くさぐさ** 種々。いろいろ。

自二妾を抱え、其中飲食す。女貳人、一はこつじきもの、棄子なるをひろひて子とす。一は実子、先妻の子なりけるが、此昌庵が放蕩なるをもて去りし。後壱人、これも又妾を引來たりしをもて去ル。妾一ハ深川豊倉といふ家の妓、名

をさんといふ、一は稽者なるよし。

自ら二人の妾を抱え、その中で飲食している。娘が二人、一人は貧しいものの捨て子であつたのを拾つて子とした。一人は実子、先妻の子なのだが、この昌庵が放蕩であるために(先妻は)去つた。あと一人(の妻)、これもまた(昌庵が)妾を家に入れたために去つた。妾の一人は深川の豊倉という家の芸妓で、名をさん(きん)という。一人は芸者であるという。

※ **深川** 東京都江東区北西部の地名。富岡八幡宮の門前町。江戸時代は木材の集散地、木場として繁栄。

※ **妓** 酒席で、音曲・歌舞などをもつて客に応接する女性。あそびめ。うたいめ。遊女。芸妓。

※ **さん** 「きん」の誤り。深川の豊倉屋の芸妓であつたが、昌庵の妾となり同棲。昌庵の没後、医院の跡地に「宮川」という料理店を営み、明治三年、七十歳で没した。

弟子二人、僕婢。賓客は一郷の游冶、遠郷風流才子、皆此家をさし至る。誠に一郷第一の俠医といふべし。

弟子は二人、ほかに下男と下女がいる。賓客はこの郷の遊び人、遠くの郷の風流な才子など、皆この家をめざして寄つて来る。誠にこの郷第一の俠医といふべきである。

※ **游冶** (「冶」は飾る意) 遊びにふけり、容姿を

飾ること。また、その男。遊冶郎。

此夜余に接するもの桐雨粟田重蔵といふ。画を文晁にまなび人物を能す、又益を武清に乞ふ、此町の組頭をつとむ。性温厚人物也。与印同印。蘭溪佐羽清助詩を五山、天民等に学び、放翁を倣す。これハ此郷の豪商佐羽清左衛門が弟にて今分家、上毛屋といふ。話を好、能事をも手擬す、性恬、胸に一物なし。

この夜私に接してきた者は、桐雨という号の粟田重蔵という。絵を文晁に学び、人物画に秀でている。またさらに絵を武清からも学んだ。この町の組頭を務めている。性格は温厚な好人物である。組頭は与頭とも書く。もう一人、蘭溪と号する佐羽清助は詩を菊地五山、大窪詩仏らに学び、陸放翁を手本としている。これはこの郷の豪商佐羽清左衛門(清右衛門)の弟であつて、今では分家して上毛屋という。話を好み、能をも手まねで歌ってみせる。性格はあっさりしており、心中にたくらみはない。

※ **桐雨粟田重蔵** 二代目重蔵。父は初代佐羽清右衛門の子で、粟田利左衛門の養子となつた。桐生新町で織物買次商を営む。天保八年に桐生新町の名主に選任され、安政三年(一八五〇)没。

※ **文晁** 谷文晁。一七六三—一八四三。江戸時代後期の画家。華山の絵の師。関東の南画を確立し、多くの門人を擁した。

※ **益** ます。いっそう優れる。まさる。秀でる。

※ 武清 喜多武清。華山と同門、文晁門下の画家。
 ※ 与印同印 「印」には「文字・形などをしるす」という意味があり、「組頭」は「与頭」とも書くので、そのことをメモ書きしたのであろう。

※ 蘭溪佐羽清助 二世佐羽清右衛門の五男で分家。桐生新町で織物買次商を営む。朝川善庵に儒学、大窪詩仏に漢詩を学び、桐生詩社の盟主となる。天保七年、江戸で没。なお、華山は、十五日の記事でも「清右衛門」を「清左衛門」と書いている。

※ 五山 菊池五山。一七六九—一八四九。江戸時代後期の漢詩人。名は桐孫、五山または娛庵と号した。讃岐国高松の生まれ。京都で柴野栗山に学び、江戸で市河寛斎の門に入る。

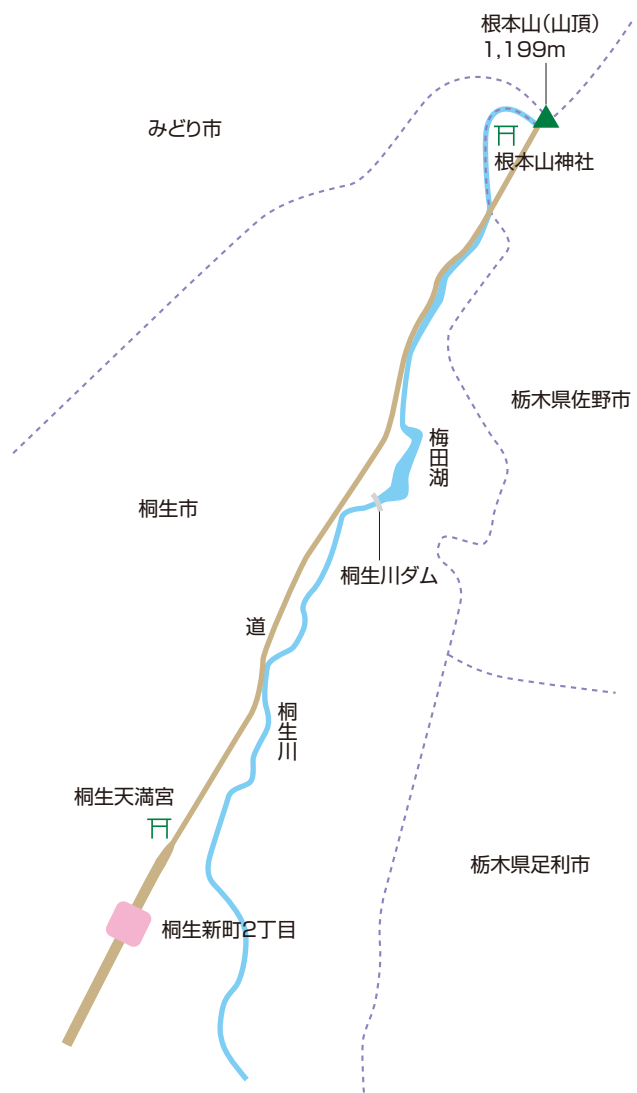
※ 天民 大窪詩仏。一七六七—一八三七。江戸時代後期の漢詩人。名は行、字は天民。常陸国の人。

※ 放翁 陸游。南宋前期の詩人。放翁と号す。孝宗に召されて枢密院編集。

※ 能事 「のうごと」と読んで、能のことか。
 ※ 手擬 手真似か。

十八日
 けふハ下野の根本山へ参らむと、宵より行厨酒壺など用意せしが、雨ふりてやむ。根本山下野の国にありて足尾日光に連る。

桐生新町から根本山略図



十八日
 今日下野国の根本山へお参りしようと思ひ、夜のうちから弁当、酒壺などを用意していたが、雨が降ったので中止した。根本山は下野国（栃木県）にあつて足尾や日光に連なつてゐる。

※ 根本山 桐生市梅田町・みどり市（旧勢多郡東村）・栃木県佐野市（旧安蘇郡田沼町）にまたがる山。標高一一九九m。群馬・栃木県境にあり、渡良瀬川の支流桐生川の源流部に位置する。登山口は桐生市梅田町にある。

※ 雨ふりてやむ 予定通り登山できれば根本山からの眺望を描くことができたのに、残念である。ところで、華山は日帰りの計画だった

のであろうか。桐生新町から山頂まで片道約二〇kmあり、しかも一〇〇〇m以上登らなければならぬ。大変なことである。

※ 根本山下野の国にあり かつて上野・下野の境は桐生川で、根本山神社は彦根藩井伊家の飛び地藩領にあり、江戸時代末期に井伊直弼の祈禱所として栄えた。防火防犯の神として信仰され、江戸から根本山への参拝客への案内書も印刷されていた。県境は変更されたが、神社の位置は今も栃木県という。

(続)

田原市博物館所蔵品から 渡辺崋山筆『客坐掌記(天保九年)』⑪



(図) 木竹

霜柯竹篠*
乙未小春 倣東坡居士

去月半より時候不宣、土用に入候得共、重着致候、時服着ニ兼程二候得は、当年も又々凶作ニ可相成哉之旨、中納言殿存念、別紙之通被申述候、扱々品事ニ存候、然は自分も右同様心得は、此両家中ハ不申及、領知小民迄も、中納言殿へ厚キ存念を受継、節儉不怠、

竹篠 しのだけ、
東坡居士 蘇軾(一〇三六〜一〇一〇)、字子瞻、自号東坡居士、眉州眉山(四川眉山)人、嘉祐二年(一〇五七)進士、官至端明殿翰林侍讀学士、礼部尚書、詩、文、書、画俱成大家(中・1527)。

時服 その時候に応じて着る衣服。
中納言殿 水戸藩主徳川光圀(一六二八〜一七〇〇)、徳川頼房の三男、(在職一六六一〜一六九〇)。
存念 おもいより、考え。



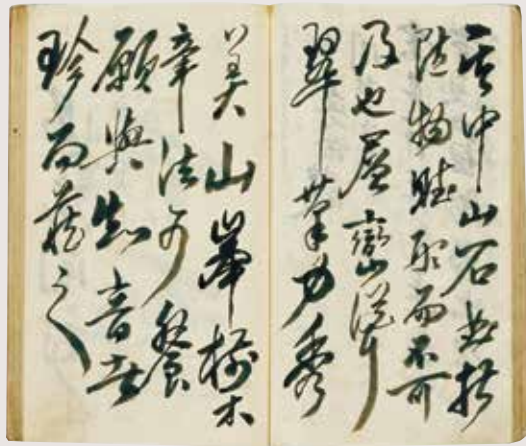
右尊慮を安し候様、心掛可申もの也
六月四日
松平播磨守様
御名御在判

○マフリノ島(日本ノ側ノボラといふ島に屬ス南部)
○ヒルカニ(二百五十ノリヨギウアタロト云々、多トト又スト)
○マテオ北(マテオデロスヒス又北ヒルカニ)
○マテオ南(マテオデロスヒス又南ヒルカニ)
○マテオ東(マテオデロスヒス又東ヒルカニ)
○マテオ西(マテオデロスヒス又西ヒルカニ)

室叡
童心道人蒲目存
園林日涉園
余見目存乎、巻数十本、此画頗為出色

松平播磨守 松平播磨守頼繩(水戸(府中)、在職一八三三〜一八六二)、水戸徳川家連枝、陸奥国・常陸国二万石、陣屋は常陸府中(茨城県石岡市)・陸奥長沼(福島県長沼町)。
マフリノ島 鳥島か。Batouan(仏)このとり。
ボン Bonin 無人島(小笠原諸島)。
ヒルカニ Valdekan 火山 硫黄島か。
イスロス Isas Lobos(ル) ロボス島ギウアタロウ。Guadalupe。
グアタルベ(メキシコ 太平洋側の島)。
イセントトマス Saint Thomas(ハーシン諸島)。
マテオ Marcelo(ブラジル)。
トマスロサントス Todos as Santos 湾(ブラジル)。
バナタ デロスヒス 未詳。
アセヘード シェサリナス 未詳。

青島 海淀 Haidan 北京市河港。
蒲目存 上睿(一六三四〜?)、字静睿、一作溥睿、号目存、蒲室子、童心行者、呉(江蘇蘇州呉県)人、巧山水花鳥(中・12)。



其中山石曲、折
随物畦*、而不可
及也、層巒聳
翠帶、力秀

美山峯、樹木
章法所、餐
願与知音、者
珍而藏之

畦 田畑に境、転じて、境界、
範圍、法則。
層巒聳 重なり連なった山々。

知音 心をよく理解してくれる
親友。

シヤカタラ Djakarta
十六世紀初めごろから貿易港と
してスダカラバ Sund Calapa
(咬哈吧) と呼んだが一五二七年
バンタン王国が占領してシヤカ
ルタ Djakarta と改称したが、外
国人はなままってシヤカタラ
Djakarta になった、一六二一年
オランダはバタヴィア Batavia
を公称としたが、一九四五年ジ
ヤカルタの旧名に復した。
黒ほう 黒色人。



遇庭聞竜
五月十三日出船、六月六日迄、日数
二百三日程
入、蘭船シヤカタラ出シ
人数四十八人 四十人 蘭人
四人 黒ほう

一以貫之
尽 伝
治政 白

一以貫之 「論語」里仁篇三に「子
日、参乎、吾道一以貫之哉、曾
子曰、唯、子出、門人日、何謂也、
曾子曰、夫子之道、忠恕而已矣」
とある。



(扇面圖 山水)

癸酉夏

五月

作為

：：：：了

正之

□ □
南州

索靖*
字幼安少

倪承寬*

雨洗高秋淨天

耘齋洪震*

疆余

○○○
字

南州 余穉 清、字南州、江蘇
武進人、宮內庭供奉、巧画（中·
265）。

索靖（二三九～三〇三）字幼安、
敦煌（甘肅敦煌）人、官尚書郎、
封安樂亭候（中·749）。

倪承寬（二七二～一七八三）、字

余疆、号敬堂、仁和（杭州）人、

乾隆進士、官倉場侍郎、以詩文、

書法著於時、間作山水（中·653）。

耘齋洪震 未詳。



(圖 龍)

(圖 龍)

平成二十六年年度華山・史学研究会研修視察
明石城・姫路城を訪ねる

平成二十六年年度華山・史学研究会研修視察は、十月四、五日、土日曜日にかけての一泊二日で行われました。今回は、渡辺華山の生誕地、江戸城半蔵門前の田原藩上屋敷に隣り合わせで、渡辺華山と付き合ひのある藩士が多くいた明石藩の地元と華山が仕えた三宅康直の実家でもある姫路の地を訪ねることにしました。

当日、午前九時過ぎに豊橋駅に集合した会員は、石川洋一・加藤克己・鈴木利昌・山田哲夫の四名でした。豊橋駅を九時二十二分の新幹線こだま号で出発し、まずは新大阪まで移動し、新大阪からは東海道本線を利用して明石へ移動、明石駅に降り立つとホームからは北側に明石公園内の明石城がよく見えます。まずは昼が近いので、明石駅コンコース内にある明石観光案内所で市内の観光案内資料を入手し、昼食の場所を尋ねます。明石駅とその南側にあたる明石港の間には、魚の棚商店街があります。この商店街は明石城築城の四百年前にできた商店街で、約百軒の店が軒を連ねています。そちらへ向かえば、食事場所はたくさんあるとの情報を得て、すこし散策しながら、昼食会場を探しました。

昼食後、魚の棚商店街を一回りし、明石城の正出入口から水堀を渡り、明石公園を西側から廻ってみます。明石城は、国指定史跡で、交通の要所として、西国の外様大名の抑えの城として位置付けられていました。明石城本丸跡には、二つの櫓が現存し、重要文化財に指定されています。その一つは、坤櫓（ひつじさるやぐら）と言い、天守閣が造られなかった明石城では、最大の規模を持つ櫓で、天守台のすぐ南にあり、天守閣に変わる役割を果たしたとみられるものです。桁行六間（十・九メートル）、梁間五間（九・〇九メートル）、高さ七間二尺九寸（十三・六メートル）の入り母屋づくりです。もう一つは、巽櫓で、南東端に築かれた三層の櫓です。桁行き五間（九・〇九メートル）、梁間四間（七・二七メートル）、高さ七間一寸（十二・一九メートル）の隅櫓で、妻部を東西に置く入り母屋づくりです。昭和五十七年の大改修で、他から移されたものであることが明らかになり、伏見城からの移築説が裏付けられたものとこのことでした。訪ねた日は、十月の土曜日で、当月の土日祝日は特別に中を見学できました。また、二つの櫓の間にイルミネーションプロジェクト「夜空に浮かぶ光の天守閣」が設置され、夜にはライトが点灯し、作られなかった天守閣が浮かび上がるイベントを開催していました。



その後、明石市立文化博物館を訪ねました。企画展として「明石藩の世界Ⅱ」が開催されています。博物館には、明石の歴史を学習できる常設展示室もあり、見学後は城を散策したので、館に隣り合わせた喫茶室で一休みし、駅方面へ戻ります。当日は、芝生広場で薪能が開催されるそうので、多くの方が並んでいました。明石城武蔵の庭園を見学します。山陽本線で明石駅から二十五分ほどかけて、姫路駅へ向かいます。宿泊は姫路駅近くで、徒歩五分ほどのアパホテル姫路駅北です。チェックイン後、暗くなつてから、毎年の視察で同じパターンですが、食事所（アルコールあり）へ向かったのです。地元の魚や明石焼を楽しみました。

第二日目は、ホテルをチェックアウトし、アーケード街を通って姫路城を目指します。途中でウォーキングをしている方に方角を尋ねると、姫路城を見渡せる場所があるという情報を聞き、イーグレひめじの屋上へ上がりました。イーグレひめじは、四階建てで、姫路城南側の大手前公園に隣接し、男女共同参画センター、国際交流センター、コミュニティFM局やレストランなどがあります。姫路城を正面に臨む抜群のロケーションで、イーグレは姫路城の別名である白鷺のことです。まだ姫路城は平成二十一年秋から始まった工事中ですが、建物を覆っていた屋根や壁は取り外され、外観を見ることができま



が発行される頃には、グラウンドオープンの予定とのことでした。次に、姫路城大手前公園の西側にある家老屋敷跡公園内にあるひめじの黒田官兵衛大河ドラマ館へ向かいます。体験型展示施設で、四つのテーマで構成されています。一つ目の「官兵衛と姫路城」では、幟に囲まれた物見櫓が迎えます。官兵衛の居室も再現されています。二つ目は、大河ドラマのメイキング映像を見られる「官兵衛シアター」、三つ目は、「戦いの系譜」で、官兵衛が幽閉される有岡城の牢獄を再現。土牢に閉じ込められた官兵衛の体験もでき、撮影もできます。最後は「戦国軍師列伝」です。ここで、姫路城周辺マップを入手し、次の行程の作戦を立てました。姫路城天守閣へ向かう人と兵庫県立歴史博物館と姫路文学館を見学する人に



分かれます。筆者は、兵庫県立歴史博物館と姫路文学館コースを選びました。兵庫県立歴史博物館特別展は「播磨と本願寺」です。サブタイトルは「親鸞・蓮如と念仏の世界」で、浄土真宗が播磨地方にどのように伝わっていったかを探るものです。また、姫路城周辺には、姫路市立美術館や姫路神社などもあります。以前から訪ねてみたかった姫路文学館へ向かいます。この移動には、一乗車百円の姫路市の観光ループバスを利用しました。

姫路城からやや離れている姫路文学館は市立の施設で、平成三年に北館が開館後、同八年に司馬遼太郎記念室を中心にした南館が増築された。現在の三河田原駅を設計した安藤忠雄氏の設計の建物でもあります。

それぞれの見学者が姫路城大手前公園前の姫路城前交差点に集合し、徒歩で姫路駅へ向かいます。姫路駅近くのレストランでやや遅い昼食を取り、新幹線にて帰路へと向かいました。

研究会員 鈴木利昌

華山の田原行（十八）

二月二十日（続）

前回は、華山が今回の旅の旅費六両をすべて使ったこと、さらに年寄役就任後、生活が苦しくなったこと、収入を得るためにスイセンの絵をかいたのではないかといいことを述べました。

その結果、「猶客中も貧しき事かぎりなし。」と記しています。客中というのは、旅の途中のことです。田原滞在中、苦しい日々を送ったようです。

二月十七日に「此度もらひもの」として、煮豆や酒などたくさんのもをもらった記述がありますが（本稿第十一回・会報二十七号）、旅先での生活の糧としては助かったようです。

しかし、華山にとっては、滞在中の生活は苦しかったとみえ、「此日覚右衛門たのミ袴一、衣一を典し、金式分式朱を得る。」と、親戚の赤井覚右衛門に頼んで、袴と衣を典して（質に入れる）います。

田原藩の様子は分かりませんが、華山の時代、質屋は隆盛を極め、江戸では、三百人あたり一軒程度といわれるくらい質屋があったようです。よ

く持ち込まれた質草は着物で、ある意味リユースが盛んでした。着物の需要が高かったので、古着商も盛んでした。覚右衛門が持ち込んだのは古着商だったのかもしれませんが、袴と衣で二分二朱を得ます。この時代の貨幣の価値を現在の価値に変換するのは難しいですが、当時は、四分で一両、十六朱で一分に換算されていました。一両を十万円とすると、五万円程度ということになり、かなり高価な額で取引されていたようです。

華山は、二分二朱を生活費として使うのではなく、「壹分ハ江戸へ遣す。」と、江戸に送金もしています。ここにも、年寄役とはいえ生活が苦しい渡辺家の様子が表れていると思います。

この日の夜は、上條喜兵衛、赤井覚右衛門、鈴木春山、鈴木喜六が来て、小酌と記されています。質入れによる臨時の収入のためか、四名による差し入れかは不明です。

ここで、華山が田原に着いた翌日の二月一日からこの日までの夜の来客と小酌について、『全樂堂日録』の記述から抜粋してみます。

- 一日 なし
- 二日 夜人々来
- 三日 なし
- 四日 記述自体なし
- 五日 喜六、俊二、元喜と小酌し、皆々とまる
- 六日 なし
- 七日 覚右衛門、伊織、玄喜、喜六、俊三来小

『游相日記』から

「客舎酔舞図」と題した厚木万年屋での酒宴の様子。中央で横になり「予酔臥」とあるのが華山。



- 八日 夜人不来
- 九日 萱生源左衛門、二村吉田太夫、萱生双松と小酌
- 十日 記述自体なし

- 十一日 医師玄喜来、小酌
- 十二日 なし
- 十三日 半吾、俊三、喜六来（内容は分からない）
- 十四日 なし

十五日 喜六が小屋にて湯に入

十六日 赤井、喜六、玄喜、謙吉、俊二来、小酌

十七日 なし

十八日 夕、喜六来。調て箸を同うし食す

十九日 なし

二十日 上條喜兵衛、覚右エ門、俊二、喜六来小酌

はつきりと記されているものだけで六回。三週間での回数は多いといえるのではないでしょう。江戸からの珍客ということで知り合いが集まるのかもしれない。

華山自身は飲酒を好んだようで、『游相日記』等の紀行文に、旅先で今でいう宴会をたびたび開いた記述がみられます。このあたり、生活が多少苦しくとも人づきあいを大切にする華山の人間性がうかがわれます。しかし、華山は酒豪というほどでなく、『游相日記』には、「夜明るまで、歌ひつ舞つ、予をなくさむ。」とあるにもかかわらず、主賓である華山が前ページの絵のように酔臥してしまい、「酔臥して客の去るをしらす。」という状態になってしまいます。

『全楽堂日録』にも「予先だちて寐」という記述が見られます。もっとも田原での小酌の相手は気の置けない相手だったからかもしれません。

二月二十一日

「俊二、喜六一夜宿る。」とありますので、鈴木春三、鈴木喜六は前夜の小酌の後、華山のもとに泊まっていたようです。

「覚右エ門来、喜兵衛来、左内来、三郎左エ門来、源左エ門に月代髪たのむ。」

前夜に続き、上條喜兵衛、赤井覚右衛門さらに、近藤左内、鍋木三郎左エ門が華山のもとを訪れます。何のために来たかは不明です。萱生源左エ門も訪れますが、源左エ門には月代を剃らせます。



華山の月代 (椿椿山筆)

月代とは、兜をかぶった時に頭が蒸れるのを防ぐために、前額側から頭頂部を半月形に剃り落とした髪型で、江戸時代は武士や町人の間で慣例となっていた風俗です。かつては1本1本毛髪を抜いていたようですが、江戸時代頃から、剃刀で剃るようになりました。ちなみに月代部分に結つた鬘を載せていたので、幕末に武士の頭を見た外国人が、日本人は頭にピストルを載せていると勘違いしたのは有名な話です。

月代は剃っていたため、数日もすると毛髪が生えてくるので、頻繁に剃らなければなりません。しかし、頭頂部のため、自分一人で剃るのは難しく、人に剃ってもらうことが多かったようです。そのため繁盛したのが理容業・髪結いです。料金としては、天保の改革で値下げを命じられるまでは二十八文かかったようです。一両が四〇〇〇文ですから、ここでも一両を十万円とすると、七百円ということになります。ひと月にかかる理容代だけでも莫迦になりません。

月代を剃ることは、いつでも兜をかぶって主君のために戦えることの表れとして武士のたしなみの一つでもありました。時代劇にもありますが、浪人は節約のためもありますが、月代を伸ばした総髪でもよかったわけです。

(続)

田原市博物館企画展のご案内

四月十一日(土) ～ 五月二十四日(日)

春の企画展 帰ってきた国指定重要文化財 渡辺

華山筆千山万水図の初公開 奈良岩雄氏寄贈資料

近年寄贈された華山の代表作「千山万水図」、華山の友人である桜間青崖・岡本秋暉、弟子の椿椿山・福田半香・平井顕斎、渡辺小華・松林桂月をはじめとする華椿系画家の作品も展示します。

講演会 五月三日(日) 午後一時三十分

渡辺華山の海防思想と千山万水図

講師 掛川市二の丸美術館アドバイザー・文学博士

日比野秀男氏

華山会館鶴の間



渡辺華山筆千山万水図 天保十二年(一八四二)



椿椿山筆名花十友図 弘化四年(一八四七)



岡本秋暉筆波濤群禽図 安政二年(一八五五)

九月五日(土) ～ 十二月六日(日)

秋の企画展 写楽と豊国、役者絵と美人画の流れ

浮世絵黄金期、不思議な魅力の役者絵でデビューした写楽とライバルの新進・豊国。一見異色な組み合わせのように思われますが、豊国は黄金期には歌麿や清長まがいの美人画を描き、写楽デビュー時に、そのライバルとして役者絵を描き、人気を得ました。写楽、歌麿が消えた後、浮世絵界の大御所として歌川派をリードしてきました。写楽は浮世絵界の世界的巨匠、豊国は浮世絵界の大親分です。「写楽と豊国」異色な組み合わせ、それに粹で、イナセな「美人や役者」の浮世絵展にご期待ください。



歌川豊国
三世沢村宗十郎の
大星由良之助



喜多川歌麿
山姥と金太郎



東洲斎写楽
嵐龍蔵の金貨石部金吉

公益財団法人華山会
田原市博物館
田原市渥美郷土資料館
からご案内

田原市博物館企画展のご案内

四月十一日(土)～五月二十四日(日)
春の企画展 帰ってきた国指定重要文化財 渡辺華山筆千山万水図(初公開) 奈良岩雄氏寄贈資料 (特別、企画展示室一)
右記の企画展は15ページをご覧ください。

展示解説(講師は当館学芸員)
四月十一日(土)・五月六日(水・祝) 午前十一時
同時開催・田原藩(藩日記)の出来事から(企画展示室二)

七月十八日(土)～八月三十日(日)
夏の企画展 戦後70年 渥美半島と戦争 (企画展示室一・二)

渥美半島には、陸軍伊良湖射場をはじめとする戦争遺跡が残されています。本展では、戦後70年を契機に渥美半島と戦争との関わりを紹介します。同時開催・渡辺華山の山水画(特別

展示室)華山の師、谷文晁も展示します。ジオツアー 八月予定 詳細はチラシ等でお知らせします。

九月五日(土)～十二月六日(日)

秋の企画展 写楽と豊国(役者絵と美人画の流れ) (企画展示室一・二)
右記の企画展は15ページをご覧ください。

四月二十五日(土)～六月七日(日)

渥美郷土資料館春の企画展 春の企画展 和地・堀切・伊良湖小学校の思い出(企画展示室)
4月に和地・堀切・伊良湖小学校が統合し、伊良湖岬小学校が開校しました。100年以上の歴史がある各校にあった美術作品や写真でその歴史を振り返ります。詳細はチラシ等でお知らせします。

平常展のご案内

五月三十日(土)～七月十二日(日)
渡辺華山と田原藩(特別展示室)
没後10周年 白井青淵・石川雲鶴展 (企画展示室一・二)
常設展示室では渡辺華山の生涯を展示しています。民俗資料館では田原の暮らしを中心に

に展示しています。渥美郷土資料館・赤羽根文化会館展示室でも所蔵品を展示しています。

観覧料

春・夏の企画展

一般 四〇〇円(三二〇円)

秋の企画展

一般 五〇〇円(四〇〇円)

企画展時は常設、特別展示室のみ観覧の方は二一〇円(一六〇円) 企画展開催時は小・中学生無料 毎週土曜日は小中高生無料 展示替初日は無料開放します。

平常時

一般 二一〇円(一六〇円)
小・中学生 一〇〇円(八〇円)
()内は二十人以上の団体料金
東三河在住の小中学生は、ほの国子どもパスポートもご利用ください。
休館 毎週月曜日(祝日の場合はその翌日)、展示替日

(公財)華山会から
華山・史学研究会会員募集中

申込場所 華山会館事務室
毎月第四土曜日研究会
視察研修(年一回)に参加できます。

田原市博物館友の会会員募集中

入会申込書に年会費千円を添えてお申し込みください。

特典

博物館への無料入館
展覧会・催し物のお知らせ
見学会に参加できます。
博物館だより・華山会報をお送りします。

華山会報 第二十四号

平成二十七年四月十一日発行
編集発行 公益財団法人華山会
理事長 鈴木 愿
常務理事 菰田 稀一
事務局長 讃岐 俊宣
〒四四一―三四二―一

愛知県田原市田原町巴江二二の一
TEL 〇五三一・二二・一七〇〇
FAX 〇五三一・二二・一七〇一

編集協力

田原市博物館
華山・史学研究会
会長 山田哲夫

吉川利明 加藤克己
石川洋一 小林一弘
林 哲志 中村正子
小川金一 柴田雅芳
中神昌秀 増山禎之
池戸清子

※華山会報ご希望の方は華山会館・田原市博物館にお申し出ください。次回発行予定 平成二十七年十一月一日